

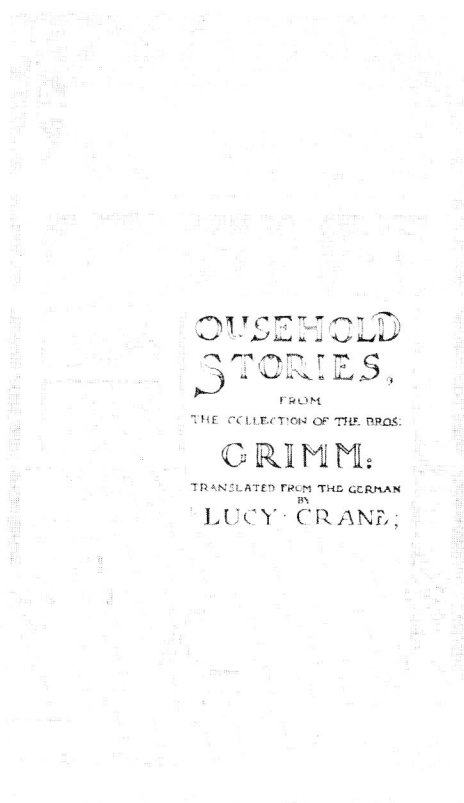
A HISTORY OF
ENGLISH AND
AMERICAN
CHILDREN'S
LITERATURE

英米児童文学史

瀬田 貞二

猪熊 葉子

神宮 輝夫



HOUSEHOLD
STORIES,
FROM
THE COLLECTION OF THE BROS.
GRIMM:
TRANSLATED FROM THE GERMAN
BY
LUCY CRANE;

研 究 社

著者紹介

瀬田 貞二 (せた・ていじ)

大正5年(1916)生まれ。東京大学国文科卒。現在、青山学院大学女子短大講師。児童文学の翻訳に「ナルニア国ものがたり」(岩波書店)他多数。また、リリアン・H・スミス『児童文学論』(石井桃子・渡辺茂男共訳、岩波書店)がある。

猪熊 葉子 (いのくま・ようこ)

昭和3年(1928)生まれ。聖心女子大学院卒。現在、聖心女子大学講師。共著書『文学・ことば・文化』(研究社)の他、児童文学の翻訳に『太陽の戦士』『ともしびをかかげて』(ともに岩波書店)など多数。

神宮 輝夫 (じんぐう・てるお)

昭和7年(1932)生まれ。早稲田大学英文科卒。現在、青山学院大学助教授。著書に『子供に読ませたい本』(社会思想社)、『世界児童文学案内』(理論社)、『童話への招待』(日本放送出版協会)、児童文学の翻訳に「アーサー・ランサム全集」(岩波書店)など多数。

英米児童文学史

1971年8月30日 初版発行

定価 1500 円



KENKYUSHA

〈検印省略〉

著者	瀬田 貞二 猪熊 葉子 神宮 輝夫
発行者	小酒井貞一郎
印刷所	研究社印刷株式会社
発行所	研究社出版株式会社 〒100 東京都新宿区神楽坂1の2 電話 東京 (269) 4521 (代) 振替口座東京 83761 番

写真製版	学術製版所
美術印刷	大平 舎
製本	新 栄 社
製 函	加藤製函所

落丁・乱丁の際はおとりかえいたします

1098-411018-1860

序

児童文学とは何か、と問われる質問ほど、一見答えやすく、そして、その本質にたち戻って考える時、答えにくい質問はない。なぜなら、文学の範疇のなかで、児童文学ほど、与え手と読者の対立が明確な文学は他にないからである。子どもに、それを読ませようとする大人達——親、教師、著者、編集者——と、読者である子ども達の評価が、しばしば際立って対立するところに、児童文学の本質を見極めるむずかしさがある。大人達の見解や意識が、その作品の価値をどれほど高く認めても、子ども達の興味や情感が、それを拒否する時に、その作品は児童文学としては存在の価値さえもないのである。子ども達に読みつがれるという、ただ一つの方法によって、子ども達の評価の正しさ、子ども達が真に求める文学は何かということが明示されてきたのが、児童文学の歴史なのである。少なくとも、イギリスとアメリカにおいては、そうであった。

i 序

イギリスにおいては、一九世紀の中葉までに書かれ、今日、児童文学の古典として読みつがれているものを見てもわかるように、本来、大人のために書かれたそれらを児童文学と決めたのは、読者の子ども達であった。その時代、文学には、意識の上で大人と子どもとの間の境界線はなかったのである。『天路歷程』、『ガリヴァー旅行

記』、『ロビンソン漂流記』、また、ウォルター・スコット、ジェーン・オースティンの作品のかずかずは、当時も今でも、作者は児童文学者ではなかったのに、子ども達に愛読されている。子ども達が本来彼らに無縁の作品を彼らのものにするとなえ方が、後世のイギリスおよびアメリカの児童文学の一つの基本的なパターンを作る。ディケンズやマーク・トウェインやオルコットは、子ども達をまったく意識して書かなかったのに、彼らの名を知らぬ子どもはいない。あるいは『ホビット』のトールキン教授にしても。

ヴィクトリア朝になると、子ども達を教化し、楽しませるために、物語が書かれはじめた。と同時に、子ども達にとって望ましくない要素が、そこからとりのぞかれた。そうすると文学のなかで、子ども達の読む領域は変質をはじめ、ここに、大人の文学と児童文学との協議離婚が行なわれた。ユーイング夫人、モルズワース夫人等は、協議離婚の代表者だが、ルイス・キャロル、エドワード・リア、キングズリー、ステイヴァンソン、キップリング、ドイル等を、私達は、どこに位置づけるべきなのか。これら偉大な作家達は、明らかに、まぎれもなく子ども達のために書いたのである。だが、『ふしぎの国のアリス』も『ナンセンス・ブック』も『水の子』も『宝島』も『ジャングル・ブック』も『シャーロック・ホームズ』も、子ども達だけでなく、大人達にも愛読されているのである。

イギリスの遺産を分配されたアメリカでも、同じような現象が起こる。サンドバーグ、ポー、ホーソン、ロングフェロー、メルヴィル、ソーロをはじめ、ストウ夫人、オルコット、トウェイン等の詩人、文学者の作品の多くを、アメリカの少年少女達は愛読する。かつ、『セント・ニコラス』に代表されるすぐれた児童雑誌が、児童文学の原野を、ものごとくに沃野に変える時代——一九世紀末葉から二〇世紀の初頭——に、アメリカの子ども達は、オルコット、トウェインに加えて、パイル、ストックトン、ハリス等、アメリカの生んだ児童文学者の

物語に、新天地の息吹きを満喫すると同時に、イギリスの子ども達同様、キップリング、ステイーヴンソンの描く冒険世界に没入もするのである。

子ども達のために書かれた物語が、大人の読者にも文字通り愛読されるという現象は、イギリスおよびアメリカの児童文学に共通する、もう一つの基本的なパターンとなる。『ふしぎの国のアリス』も『ナンセンス・ブック』も、『リーマスじいや』も『楽しい川辺』も『熊のプーさん』も『ロビン・フッドのゆかいな冒険』も『メアリー・ポピンズ』も『ナルニア国物語』も『ドリトル先生物語』も、意図的に子ども達のために書かれたのに、大人の読者達を魅了してやまない力を持つ。

しかし、同じ英語を話す国民でありながら、イギリスとアメリカの歴史と風土の相違は、あたかも国民性の違いのようなニュアンスの違いを、児童文学の世界に感じさせるのである。たとえば冒険小説にしても、イギリスは海洋を舞台とすれば、アメリカは大陸を舞台とする。イギリスのユーモアは、知性にもとづき、そこからナンセンスやファンタジーが導きだされるのに比し、アメリカでは、ヤンキー気質丸出しの哄笑が、ほら話から聞こえてくる。イギリスのファンタジーの、しつとりと神秘的なケルトの血筋から見れば、アメリカの空想には、コーンカントリーの茫漠たる広がりがある。イギリスに古い帝国の階層意識がかいま見られれば、家族を単位に新天地を開拓したアメリカには、家族主義が息づいている。イギリスでは、読者は男子ばかりなのかと思わせるほど作品の体臭が男臭いが、アメリカでは、読者に男女の偏りを感じさせない。

源を同じくしながら、また、言葉をも同じくしながら、育った環境の相違により、気質を異にしたきようだが、イギリスとアメリカの児童文学である。

日本の子ども達は、明治以来、翻訳を通じて多くのイギリス、アメリカの作品に接してきた。だが、何故か、

日本における英米文学の研究者は、子どもの本は、研究の対象にはしなかった。観方によっては、大きな陥没を残したまま、地ならしをした感じがする。今回、この手引きによって、穴埋め作業がはじまるのは、喜ばしい限りである。

慶大文学部教授

渡 辺 茂 男

英米児童文学史

目

次

序

……渡辺 茂男
i

I

英米児童文学を日本はどうとりいれたか
3

……瀬田 貞二

II

イギリス児童文学史

一七世紀
59

一八世紀
65

一九世紀——前期
92

一九世紀——後期
110

……神宮 輝夫

二〇世紀のファンタジー
151

二〇世紀のリアリズム

197

……猪熊 葉子

III

アメリカ児童文学史

教訓の時代から一九世紀・少年少女小説へ

アメリカ児童文学の成熟期

288 239

……猪熊葉子

二〇世紀初期

323

黄金時代

337

戦後から現在まで

369

……神宮輝夫

あとがき

401

索引

7

写真提供

5

参考書目

1

I

英米児童文学を

日本はどうとりいれたか

瀬田貞二

英米児童文学を

日本はどうとりいれたか

1 児童文学における英米二国の役割

イギリスは、児童文学という文学の新しい一領域を、作りあげ、育ててきた国であり、いまなおさかんにそれを発展させてやまない。それは、よほど昔に、フランスからペロー (Charles Perrault, 1628-1703) がこころみ、くだってドイツからグリム兄弟 (Jacob, 1785-1862; Wilhelm Grimm, 1786-1859) が寄与し、つづいてデンマークから H・C・アンデルセン (Hans Christian Andersen, 1805-75) がくふうした道すじはあったが、近代的な意味で、イギリスが、ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-98) の二冊のアリスによって、一分野として定着したとみることが妥当だからである。

「それは嘘ではない。子どもの本だけで、英国を再建することができるかもしれないのだから」と、フランスのすぐれた文学史家だったポール・アザール (Paul Hazard, 1878-1944) は、その随筆『本・子ども・大人』(Les Livres, les Enfants et les Hommes, 1932) のある箇所でのべた。「世界中どこをさがしても、幸多き島、あの英国ほどみにくく、子どもの本のなかに不滅の国民性をきざみこんだ国はない。」

この言葉は、誇張ではない。子どもと文学という二つの愛する対象を結びつけて、子どものための文学という一つの魅力あふるる新種のアートを作りあげたイギリスには、そのための条件が幸福にもいろいろ備わっていたと思われる。まず国民性だが、これもアザールのいうように、「英国では個人の尊重が精神生活のひとつの教義となっているが、これは子どもにも適用されている。……この国の歴史を見ると、自由に対するこの権利は、どんな迫害にも屈せず固く守られてきたことがわかる。しかもこの精神は、子どもの時から強く教えこまれているのであって……」冷酷なエゴイストでありながら、自分の愛する者に対しては、愛情をそぐことを惜しまない老大国イギリスは、子どもたちが大きくなるにつれて、子どもたちに従うようになる。そして、子どもたちの大好きなテーマ、冒険やスポーツのスリルを味わせ、彼らの詩心をつちかい、空想力をのばしてやる」ということがあっただろう。しかし、田園と馬と子どもを愛したイギリスも、真に子どもを独立の人格として認めるには、産業革命をくぐらなければならなかった。そしてディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) その他がとりあげたように、おちぶれた無垢な者たちのゆきくれた姿を見て、はじめて子どもを理解しなければならなかっただろう。イギリスは子どもを理解し、愛した。そして、子どもを子どもの実体において徹底的に描いた作家は、ケネス・グレアム (Kenneth Grahame, 1858-1933) であって、その随筆『黄金の時代』(Golden Age, 1895) の子ども像に対して、スウィンバーン (Algernon Charles Swinburne, 1837-1909) は、「ただ推服歎息のあまり、ほめる言葉がない」とまで評した。子どもをそのものとしてわかる作家が出たからこそ、児童文学は開花したのが自然であって、それは、グレアムがわが子のために書いた名作、『楽しい川べ』(Wind in the Willows, 1908) をひらけばわかることである。

一九世紀のなかには、イギリスに思想と芸術の各分野にいろいろな動きがあった。ウィリアム・モリス

(William Morris, 1834-96) やジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) のように、美意識を改変させる運動の推進者たちが現われ、プレ・ラファエル派のように、宗教と美をもとめるロマンチックな芸術グループも生まれて、そのいずれもが、児童文学の創造に無縁ではありえなかった。ラスキンなどは、グリム昔話ふうの童話『黄金の川の王さま』(*The King of the Golden River*, 1851) を創作したほどだった。そして、それから、中世憧憬が現われて、歴史物語や怪奇なロマンスが流行すると、そういう傾向も、年若いこの領域をそだてることになったし、民俗学の台頭からは、アンドルー・ラング (Andrew Lang, 1844-1912) やジョーゼフ・ジェイコブズ (Joseph Jacobs, 1854-1916) たちが、子どもたちのために昔話というふしぎな庶民の宝庫を広くひらくことになった。

薪が束ねられてほくちの火を待っていたように、何もかもいっぺんに始められた。児童理解と芸術界の動向が結びついた。そして一流の文学者が新しいジャンルづくりに参加して、基礎は高められ、広げられた。すなわち、チャールズ・キングズリー (Charles Kingsley, 1819-75) やジョージ・マクドナルド (George MacDonald, 1824-1905)、ユーイング夫人 (Juliana Horatia Ewing, 1841-85) や R・L・ステイヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-94) などが、その質を高め、その分野を多岐にわたらしめたのだった。

海をへだてて同じ言葉を話すアメリカ合衆国では、はじめイギリスに追随していた。が、「アリス」出現後まもなく、東部の不屈な一女性と南部のやや奇矯な作家とが、めいめい自身の子どものころを回想して、すぐれて典型的な作中人物を創造した。それはいうまでもなく、ルイザ・オルコット (Louisa May Alcott, 1832-88) の四人の姉妹たちと、マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835-1910) のトムとハックであって、この傑作が生まれ出したことによって、アメリカは、真に自国の特質をつかみ、追隨をやめて独自の道を歩みはじめた。そし

てイギリスに見ない、自伝的な真摯さを核としたリアリステックな小説がアメリカに脈々と流れはじめ、それはのちに、誇り高い西部開拓民の子らによる開拓生活の物語ともなり、二度の大戦につづく移民たちの子らによる祖国を題材とした異国物語ともなつて、強壮な生活意識をたやさなかつた。イギリスが児童文学を内面的に深化せしめたというとすれば、アメリカはそれを外側へ広くときはなしたというべきだろう。

アメリカが児童文学に加えたさらに大きな、第二の影響は、じつは児童図書館の卓越した組織にあった。そのことは児童文学の普及にだけではなくて、質的な向上につながつていった。ポール・アザールは、「子どものための図書館、これこそアメリカの創業にかかるものである」と述べて、自国フランスの現状をう렉たのち、つぎのように説明した。

りっぱな新進作家を生みだすために賞をさかにすること。出版と教育のもつとも強力な団体が行なつてゐるたえざる努力。子どものための図書指導員を養成する学校や講座の設置。それらの図書指導員を、もつとも有益な最新研究をするために、好みの外国へ留学させる寄付金の制度。館外貸し出しのできる図書館や農村図書館の組織。遠くはなれた村への本の郵送。成功にも慢心することなく、最良のものを求めつづける。激しい製作意欲。これらのものこそ、わたしがアメリカ合衆国で見たものである。

アザールのいう児童図書館の発展は、先覚者によつて世紀末に準備されたが、一九一〇年代にはいつて、すぐれたいく人かの児童図書館員の指導によつてにわかに達成された。児童文学の書評と論文と講座が活発になつて、作家も出版社も刺激を受け、三〇年代以後の盛況がうながされたのである。アメリカは、児童文学を拡充

し、普及させた。

ここで英米二国のそれぞれに発展した児童文学の特質にふれて、その国民性とのつながりを論ずることもできるだろう。イギリスにおけるコモンセンスとユーモア、ナンセンスとファンタジー、自由と公正、スポーツマン気質と自然愛、実直さと果敢などについて、それを作品によって立証することも興味ある課題であろう。しかしそれらは作品個々の分析を通していえることなのだから、文学史の叙述にゆずることにしたい。そして私は、わが国の児童文学が、どれほど英米の作品に刺激と影響をうけたかの程度と作用を頭におきながら、日本における英米児童文学の受容の歴史を、述べることにしたい。それは、この英米児童文学史を中心とするこの本に、極東の一地帯が蒙ったグローバルな児童文学波及の尺度を知ることにもなりえようが、主体的に見て、英米の先行諸作品が私たちに何であったか、ひいては日本の児童文学が諸国に伍してどうあるべきなのかという問題をかえりみる関連材料をさしだすためでもある。ただしこの方面の研究は少なく、将来に資料が望まれる点もあるので、以下はその試論、見とり図として寛容をねがう。

2 明治の英米児童文学紹介

日本における英米文学の初の紹介は、嘉永元年（一八四八年）の稿本『漂荒紀事』であったという。これは、蘭学者黒田麴廬が蘭語本からデフォー（Daniel Defoe, 1660-1731）の『ロビンソン・クルーソー』（*Robinson Crusoe*, 1719）を抄訳したもので、稿本のほかに写本があるだけだったし、訳者は「英吉利国、魯敏孫嶺瑠須著」とのべて、この有名な孤島小説を実録視して実用書と考えていたのだから、論外であった。

つぎに、安政四年（一八五七年）に横山由清が『魯敏遜漂行紀略』を刊行、これもわずか二〇丁ほどの要約だか